

無料テレビ会議システムを利用した

日本語会話機会の提供

学習者、教師、業界へのインパクト

村上吉文(国際交流基金日本語上級専門家)

ブダペスト日本文化センター

murakami.yoshifumi@gmail.com

【要約】

最近の研究により、ヨーロッパなどの非漢字圏では学校で日本語を学ぶ学習者よりも、自律的に学ぶ独習者の方が多く推定されている。しかし、独習者にとって教材などのリソースは十分に手に入るものの、日本語で話す相手がいないことが日本語学習上のネックになっている。一方、近年のICTの普及により、無料でテレビ会議システムが誰でも使えるようになってきている。海外の独習者と、日本に住んでいる日本語母語話者をこうしたテレビ会議システムで結びつけることができれば、日本語で話す機会がないという独習者の問題を解決することができる。また、こうしたテレビ会議システムは教師にとっては実験的な授業を気軽に実施してみることが可能になるためスキルアップの手段としての可能性があり、教育機関にとっては従来は「死に筋」と言われていたニッチなニーズでも採算の取れるようになる可能性があるため、今後は多種多様なコースがオンライン上に実施できるようになる。

1. テレビ会議システムとは

本稿で扱う「テレビ会議システム」とは、映像と音声をリアルタイムで共有し、オンライン上の複数の相手とコミュニケーションできるシステムのことである。映像には資料を表示することもできるし、カメラを通して話し手の顔をリアルタイムに表示することもできるため、ウェブ会議システムなどと呼ばれることもある。かつては「Policom」という有料のサービスが主に利用されていたが、これは普及版とされるものでも83万円もする高額なもので、個人が気楽に利用できるものではなかった。似たサービスで個人が気楽に使えるものとしてはスカイプがあったが、これは当初、一対一でしか使えなかったために日本語教育の世界では個人授業でしか使うことができなかった。その後、2011年にGoogleがハングアウトという複数の相手と映像と音声でコミュニケーションできる無料サービスを開始し、教室活動と同じようにグループダイナミクスを活かした日本語教育が行えるようになってきている。

2. 音声通話との違い

スカイプでは音声だけでなら以前から複数の相手と同時にコミュニケーションすることができた。それではハングアウトで映像も共有できるようになったことで、何が変わったのだろうか。

典型的なエピソードとして、香港理工大学の瀬尾匡輝氏と筆者が初めて対面した時のエピソードを紹介したい。瀬尾氏はそれまで実際に筆者とハングアウト以外で対面したことは一度もなかったにも

かわらず、その時「村上さん、お久しぶりです。あれ？もしかして会うの初めてでしたっけ？」と言ったのである。この言葉は、ハングアウトでリアルタイムに顔を見ながら言葉を交わすことにより、実際に対面するのと変わらないラポールの形成を行うことができることを端的に示している。

こうした体験は筆者だけではなく多くの関係者が発言しており、たとえば Facebook「反転授業の研究」グループなどで反転授業の普及につとめている田原真人氏は、自身のブログ「海外格安 Web 会議室で世界をつなぐ」の 2014 年 06 月 19 日の「世界はどのようにしてつながってきたのか」という記事で、以下のように述べている。

2012 年からヘビーユーザーとして Web 会議室や Web 教室を使い、世界各地の人とオンラインで「会って」みて感じたことは、リアルで会ってなくても、心が動くということです。

心が動けば、人と人との間に共感の輪が広がり、ムーブメントが起こる可能性があります。人と人との関係性を劇的に変化させる可能性があります。(改行ママ) <http://goo.gl/YR0vsT>

このようにテレビ会議システムを使うと、実際に対面するのが初めてなのかどうか分からないというようなことが頻繁に起きるが、これは音声だけの通話などではありえないため、従来の遠隔コミュニケーションとは質的にまったく違う事象が起きていると考えられる。

3. にほんごハングアウト！

筆者はこうした新しいコミュニケーションを日本語教育の世界にも普及すべく、「にほんごハングアウト！」というイベントを 2013 年 12 月 19 日から毎週木曜日に 60 分間、定期的に行っている。これは日本語の授業ではなく、あくまでもひとつのトピックについてお喋りをするだけの時間である。業務外のボランティアという位置づけなので本業でのイベント等があるときはキャンセルせざるを得ないが、本報告の発表時には 30 回の開催実績がある。

極力、準備などの手間もかけないようにしており、トピックも参加者の投票で自動的に決めるため、ハングアウトの 60 分以外には、SNS でイベント名とイベント時間を決めたページを共有する程度しか時間をかけていない。

前述のようにこのハングアウトの価値は会ったことがなくても「心が動く」ことにその最大の価値があるが、これは文字では表現しにくいので公開されている動画のリンクを共有したい。

<http://goo.gl/CWNEKG> (YouTube)

上記のリンクから実際の参加者の声や顔の表情をぜひご覧いただきたいが、以下に文字化した内容も共有する。

発言者

Y：エジプト人男性

N：日本人女性

U：サウジアラビア人女性

会話

Y：日本人の女の人は花みたいですね。

筆者：花？

Y：花みたい。とっても親切で。

筆者：バラの花ですか？
Y：ちっちゃい声で話して。
N：うそうそ。違う違う。Yさん、目を覚ましてください。
Y：ははは。
N：目を覚ましてください。
Y：はいはい。
N：日本人の女の人、怖いですよー。
Y：ええ？
U：世界の女どこでも怖い。
N：そうそうそう、女の人はどこでも怖いんですよ。
N：日本人可愛い、声ちいさい、やさしいって、うそうそ。
Y：ええ？ びっくりしてますよ。
N：全部、罠ですよ、罠。トラップ、トラップ。
Y：残念ですよ。（以下、笑い声で聞き取れず）

ここで留意しておきたいのは、上記の会話に参加している筆者以外のエジプト人男性も日本人女性もサウジアラビア人女性も、実際に会ったことが一度もないという点である。実際に会ったことがなくても、ハンガアウトなどのテレビ会議システムで何回か顔を合わせれば、このような冗談交じりの会話を交わすことができるようになるのである。

さて、上記のハンガアウトは毎週木曜日に定期に行っているものだが、筆者はそれ以外にも不定期のハンガアウトを幾つか行っている。

- ・にほんごハンガアウト！クロアチア 06 <http://goo.gl/Kss0SV> (Google Plus)
- ・N4のための にほんごハンガアウト！ <http://goo.gl/Q7jxeG> (Google Plus)
- ・N5のための にほんごハンガアウト <http://goo.gl/S0i4IH> (Google Plus)

クロアチアのハンガアウトは筆者が出張でクロアチアを訪問して、インターネットを使って日本語を学ぶ方法を紹介した際に、現地の日本語学習者にこうしたオンラインの会話の機会を提供するために実施しているものである。

ただし、こうした自由な会話ではレベルを分けないと他の参加者より日本語レベルの低い参加者は会話のターンが取れずに大量に話す機会は得られない。そのために実施してみたのが「N4のための にほんごハンガアウト！」である。

「N5のための にほんごハンガアウト！」はこうした自由な会話ではないが、後述する。

こうした試みは筆者以外にも広がり始めており、「日本 Go Talk! session」はマレーシア在住の「Makiko S」さんが主催しており、最近の動画は以下で閲覧することができる。<http://goo.gl/8YKUFQ> (YouTube)

また英語圏の学習者を対象に、「進撃の巨人」を題材にして日本語を学ぶハンガアウトの“Attack on Titan”も現時点では第25回まで進んでおり、最新の録画はこのリンクから閲覧することができる。<http://goo.gl/fq2v1W> (YouTube)

こうした日本の漫画やアニメを題材にしたハンガアウトの例としては、「るろうに剣心」をアラビア語を媒介語として学ぶ例も見られる。<http://goo.gl/xAnGDn> (YouTube)

4. ハングアウトが与える影響

それでは、こうしたハングアウトによって、何が変わるだろうか。ここでは「学習者」「教師」「業界」にとって、どのような意味があるかを考えてみたい。

4-1. 学習者への影響

まず学習者にとってはインターネットの進展に伴い独習者が増えているということと、その独習者は日本語で特に会話をする機会を欲しているという2点を考慮する必要がある。

まず1点目の独習者の増加の根拠であるが、交際交流基金が行っている海外の日本語教育機関調査では独習者が含まれていないということが挙げられる。これはこの調査が始まった1974年の時点では教育機関外でインターネットを駆使して日本語を学習する独習者の姿は想定されていなかったという背景あることは想像に難くない。つまり、日本語学習者の数といえば、当時は日本語教育機関の在籍者数とイコールだったのであり、当時は独習者の数は無視できる程度であったと考えられていたのである。

しかし現状はだいぶ違っている。

たとえば、筆者がFacebookの「日本ハンガリー会話サークル」というグループでアンケートを取ったところ、「主に自分で日本語を勉強している」という回答者は12名いたにもかかわらず、「主に大学や学校などで日本語を勉強している」という回答者は1名しかいなかったのである。

<http://goo.gl/fRmbws> (Facebook)

また、「The nihongo learning community」という別のFacebookのグループでおなじ質問をしたところ、「自分で by yourself」という回答を選んだメンバーは41名で、「学校で at your school」を選んだ回答者は20名であり、独習者は機関学習者の2倍以上いることが示された。

<http://goo.gl/LzvnG7> (Facebook)

さらに詳しい調査としては吉開章氏が行ったオンライン調査で1471名から回収したアンケートがあり、ここでは、非漢字圏では「学校学習者170万人、非学校学習者190万人」という日本語学習者の存在が推定されている。<http://goo.gl/c8n0JT> (SlideShare)

しかし、このように急増しつつある独習の日本語学習者は大きな課題を抱えている。前述の「日本ハンガリー会話サークル」グループで筆者が「自分で勉強するとき、どんなことで困りますか」という新たな質問を投稿したところ以下のとおりで、圧倒的に会話の機会がないことが問題になっていることが分かる。

「日本語で話す相手がほしい」：7

「質問できる相手がほしい」：2

「特に困っていることはない」：1

「勉強の計画を作るのが難しい」：1

「動機が維持できない」：1

「自分の日本語力がどのぐらいかわからない」：1

つまり、機関に頼らずに日本語を独習している学習者が大量に存在し、しかも日本語で会話する機会が足りていないということが想定される。この状況において、日本語の母語話者が無料のテレビ会議システムを使って気軽に日本語でおしゃべりする機会を提供することができれば、彼らの日本語学習上の最大の問題を解決することができるのである。

4-2. 日本語教師への影響

次に日本語教師にとって、こうした無料テレビ会議システムがどういった意味を持つのか考えてみたい。

筆者がいくつかの種類のハングアウトを主催してみて感じたことは、単なるおしゃべりの相手になるだけでも前述のように独習者には大きな意味がある一方で、これは特に日本語教師としての知識や経験が必要になるわけではないという点である。つまり、ハングアウトさえ使えば、話し相手のほしい独居老人などでも十分に意味のある活動ができるし、以下のように実際にブラジルでそうした例もある。

Kids In Brazil Learn English By Video Chatting With Lonely Seniors In Chicago

<http://www.mostwatchedtoday.com/speaking-exchange/>

しかし、日本語教師にとってもこうしたシステムは非常に大きな可能性がある。

一番大きなメリットは、自分のスキルアップの機会とすることができるという点である。というのも、ハングアウトではそれ自体がひとつの教室のようなものであり、学習者もオンラインで簡単に集めることができるからだ。

例えば筆者は所属先の国際交流基金が開発した『まるごと』という教材を学習者に教えた経験がなかったため、これを教材にした授業をしてみたいとかねてから考えていた。国際交流基金が開発したとは言っても、筆者の派遣されているブダペスト日本文化センターでは『できる』というハンガリー人用の教科書がすでに採用されていたので、使ってみる機会がなかったのである。

しかし、たまたま2014年8月16日(土曜日)の午後に予定されていた用事がキャンセルになったので、15:00から前述の「N5のための にほんごハングアウト！」を開催し、同教材を使った授業を体験することができた。これにはベトナム、ヨルダン、サウジアラビア、エジプト、日本からの参加者があったが、ここで強調しておきたいことは、このハングアウトを計画したのが授業実施のわずか30時間前だったことである。

これが仮にバーチャルな空間でなかったとしたら、面倒な手続きもなく週末に私用で教室を確保して、思い立った30時間後に学習者を集めて実験的な授業を行うことができるだろうか。最近学習者の間でモバイルラーニングなどの「スキマ時間に勉強する」というスタイルが確立しつつあるが、同じように教師にとっても「スキマ時間に授業する」ということが可能になっているのである。

4-3. 業界への影響

最後にこうした無料のテレビ会議システムが日本語教育業界全体に与える影響について考えてみたい。

前述のように、筆者は『まるごと』をオンラインで教えるという実験的な授業を、30時間前に思い立って実施することができた。それにかかる費用は毎月支払っている定額のインターネット利用料だけなので、実質的に無料である。自宅から開催したので、移動時間もかかっていない。こうして非常に低い初期投資で授業やコースや学校をオンラインで開くことができるのである。教室も机もコピー機も黒板も不要である。また、学習者は世界各地から集めることができる。

これは単に教育機関の開設費や維持費が劇的に安くなるというだけでなく、実験的な講座を次々に立ち上げることができるという意味でも画期的である。コストがほとんどかからないために、失敗してもそれほど大きな損失はなく、言い換えれば新規開設、新規参入のリスクが低いのである。

また、講師と学習者が同じ場所にいる必要もないため、従来は「死に筋」と言われていたニッチなニーズに合わせた授業を行っても採算がとれるようになるということでもある。これは米『Wired』誌の編集長であるクリス・アンダーソンが2006年に発表したロングテールという現象で、たとえばアラビア語圏では日本語学習者が散在していたために特定のアニメを題材にして日本語を学ぶという授業は考えにくかったが、オンラインで結べば、こうしたニッチなニーズの学習者をハングアウトに集めることができるのである。（ただし、上述のアラビア語話者のための「るろうに剣心」のハングアウトは無料で行われている）

学習者の多様化が指摘される一方で、日本語教師は以前から多様な背景を持つ人材が豊富に活躍してきた。エンジニアや俳優や旅行ガイドの前職を持つ者も多い。しかしながら、こうした教師の多様性を積極的に活かした授業というのは残念ながらまだあまり例が見られない。しかし、ハングアウトなどの無料テレビ会議システムを利用すれば、今までは採算の取れる可能性が低く開設されてこなかった多種多様な授業が実施できるようになるのである。こうした試みを通して、多様な学習者が多様な教師と直接つながる社会が実現することを切に望む。

参考文献

クラウドウォッチ(2009)「ポリコム、ビデオ会議システムのエントリー版－高品質・低価格で中小企業へ訴求」

http://cloud.watch.impress.co.jp/epw/docs/news/20090708_300680.html

クリス・アンダーソン(2006)「ロングテール - 売れない商品を宝の山に変える新戦略」早川書房

村上吉文(2013)「ビデオ会議システムとライブ動画配信を利用した広域オンライン日本語教師研修の試み」『言語と交流』

吉開章(2014)「日本語学習者の学習意識における*学習者本人と日本語教育者・一般日本人の認識の差」第10回日本語教育・日本研究シンポジウム口頭発表資料

<http://ssslide.com/www.slideshare.net/akirayoshikai/for-slideshare-42331966#28>